
Go Go blood girls !

悠久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Go Go blood girls!

【Nコード】

N1642F

【作者名】

悠久

【あらすじ】

ごく普通の主人公は、ある日やたら死にたがる少女と出会う。そして、日々を彼女のストッパーとして過ごしてゆくのだが…。

01 死にたがり屋と内気

「私と死んでくれない？」

話は一週間前に遡る。こんな言葉を言われた原因は私にあるのだ。

私は自他共に認める臆病者である。その上重度のドジで、何も無い所で転ぶ。だから他人に迷惑をかけないよう毎日一人で過ごしていた。そんな私は、ある日奇妙な少女に出会った。

中学二年の春、屋上で昼食を摂っていた時、一人の少女が現れた。

腰まで伸びた黒髪、透き通るような肌。整った顔立ちの彼女は迷わずフェンスに足をかけて、登り始めた。

「待って下さい！」

「…離して」

私を見たその目は何も映していなかった。

「嫌です！」

「私は退屈だから死にたいの。だから放っておいて」

全てを拒絶するような言い方だった。その今まで見た事のない暗い色を称えた目が恐ろしい。私は恐る恐る呟く。

「…楽しい事、探しましょう…これから」

「ある？楽しい事」

「私はあるって信じてます。それに、一緒に探せば見つかりますよ」とにかく、彼女を説得しようと必死だった。

彼女は花が綻ぶように微笑み、

「じゃあ約束ね」

と言った。

「どえ、それで皆瀬ユウキは止めたって訳？」

「あの子、皆瀬ユウキって名前なの？」

教室に戻り、友人の早紀に話すと、信じられないと言いたげに紙パ
ツクの牛乳を啜った。

「この学校であの子知らないのアンタ位のもんよ。と言っても私も
皆瀬の奇行を目にした訳じゃないけど、変わった子ってのは本
当み
たいね」

「奇行って、例えば…？」

「とにかく何かにつけて死にたがるのよ。一番の理由は退屈
み
たいだけど、色々あるわ。退屈に過ごす人生なんて無駄の極みだ、下
らない、そんな下らない人生は嫌だ。…とか前に聞いたわ」

「よく解らないです…」

「私だつて理解できないわよ。あの子の思考を理解出来る人なんて、
そうそう居やしないわ」

彼女が変わり者だという噂なら耳にした覚えがある。ただ、廊下で
見掛けた際美しく聡明そうな人だったのでとてもそんな突飛な言動
をするとは思えなかったのだ。

腹立たしくストローを噛む友人を見ながら、私はことりと机に頭を
乗せた。彼女は何が望みなんだろう。

放課後、校門の横でUFO研が背中を向け合せて話していた。

城金中学には部員5人のUFO研究部が存在する。実の所私も少
しばかり興味があり、未だに入部しようか迷っている。

「何してるの？」

振り返ると皆瀬ユウキだった。端正な顔に柔和な笑みを浮かべてい
る。

「あれ、UFO研の人達ですよね…」

「また学校に忍び込むとか話してるのね」

私は頭を傾げた。

「忍び込んで何するんですか？」

「直接聞いてみましょうよ」

ユウキは悪い笑みを浮かべた。

夜。

懐中電灯を持って学校の前に立ち尽くしている自分はとても滑稽に映るだろう。しかし、何故か悪い気は起こらなかった。

「お待たせ……って、あれ？懐中電灯だけ？仕方無いわねえ……はいこれ」

穏やかな笑みを浮かべて現れたユウキは私にナイフを渡した。思わず取り落とした私にユウキは人差し指を立て横に振る。

「ふふ、油断しちゃダメよ。人生何があるか解らないんだから。うつかり敵にやられて死ぬなんて、つまらない目に遭いたくないですよ」

片目を閉じてそう告げたユウキの笑みは一発で男子生徒が惚れてしまいそうなものだった。が、少なくとも校内では必要がない。私はナイフをポケットにしまい後を追う。

「皆瀬さん」

「ユウキでいいわ」

「ユウキさん。私ユウキさんが退屈しないように、頑張ろうと思うんです」

これから、と呟くと奇妙なものを見るような目で凝視された。両手の人差し指を突き合わせ、目を泳がせる。

「私も、ユウキさんみたいに自分に出来る事を精一杯やりたいんです。だからその……一緒に居ていいですか？」

ユウキが独特な甲高い笑い声を上げた。

私をよそににこりと微笑む。

「私を相手に選ぶ辺り貴女も変わってるわね。元より放すつもりなんてないわ。貴女が逃げようとしてもね」

踵を返して校舎に足を踏み入れる。その私がついていく事が既定事項のような足取りで、要望が許可された事に気付いた。

暗い廊下を進むと、妙な唸り声が聞こえて来た。

ふと窓の下を覗くと、UFO研がグラウンドで輪を成して俯いていた。

「何かしら、あれ」

「何か呼んでるみたいですよ…」

となれば決まっている、UFO研の人達だろう。彼らはUFOを呼んでいるのだ。

「よくやるわね。今日はなるべく止めといて欲しかったんだけど」

「こんな夜中に危ないですよ…」

的外れな私の意見を無視して、ユウキは踵を返して廊下を戻り始めた。

「どこ行くですか？」

「なんか嫌な予感がするわ。その前に止めさせないと」

彼女の言う嫌な予感、の定義が分からなかったが、先程から校内に嫌な雰囲気漂っている事は知っていた。彼女はその正体を知っているのだろうか。

「貴方達、今すぐその意味不明な事を止めなさい」

ビシ、と人差し指をグラウンドで輪を成しているUFO研の面々に突き付けたユウキに訝しげな視線が突き刺った。台詞を代弁するなら

「何故皆瀬ユウキが此処に」

という感じだろう。

「意味不明なりにも少しは効果はあるみたいだけどね。でも、このままじゃUFOは降りて来ないわよ」

「なんだそれ！」

「そっちの方が支離滅裂じゃないか！」

尤もなUFO研の言葉にユウキは動じない。

伶俐な微笑を称えるだけである。

「皆さん、止めましょう。こんな事を言い出した私が悪かったので。元より危険が伴うと分かっていたのに」

一人の小柄な少女が悲壮に言った。幼くかわいらしい外見とは裏腹

に大人びた口調だ。

「貴女が言い出したの？でも多分大丈夫だわ。これからはしない事ね。得体の知れないものに襲われるなんて私は嫌なもの」

悠然と踵を返すユウキを呆然とUFO研は見送り、噂に変わらず変わった少女だとの噂を残しただけのはずだった。

だったのだが。

「戸田さん、お客さん」

あまり話した事の無い快活そうな少女に呼ばれた。廊下に出ると落ち着いた面持ちでドアに凭れて立っている彼女は紛れも無く昨日の少女だった。

「戸田さん」

下手すると小学生で通ってしまいそうな外見とは裏腹にひたすら穏やかな表情で言葉を紡ぐ。

「昨日は迷惑をかけてしまってますみません。けれど私達が行おうとしていた事を理解して頂きたくて」

彼女はUFOや超能力の類いをとても愛していると言う。

「私は野崎 陸。貴女と皆瀬さんを勧誘に来ました」

「勧誘？」

「我がUFO研は常に部員を必要としています。私が思うに、貴女達が昨日学校へ来たのはオカルト的なものを求めてだと思っただけです」

「えっと、…」

私はともかくユウキは恐らく違う。彼女はひたすら退屈でなくなる術を探しているだけだ。そして私は、彼女を自殺させない為に行動を共にしている。

「普通と違うという事は悪い事じゃありません。その点では皆瀬さんは良い人材です。少し極端過ぎますけれど」

そう言つて陸はくすくすと笑つた。その顔が悪戯好きな子供のよう
で、思わず微笑む。

「私もUFO研に入つてみたかったです。後で皆瀬さんにも話し
て置きますね」

「じゃあ、放課後部室で待っていますから」
陸が嬉しげに笑つた。

昼休み。

最近ユウキと此処で昼食を摂るのが日課と化している屋上で爆弾発
言を聞いた。

「貴女は私と死んだ方がいいと思うの」

「死なないつて約束ですよー！」

「死なないとは言つてないわ。それに楽しい事なんて一つしか無い
もの」

「？」

「貴女と遊ぶ事」

そんな事は無いと思つた。

本当にそんな事は無いのだ。ユウキが私を選んだ事自体不思議だが、
私と行動を共にしている理由も不明だ。困惑が顔に出ているである
う私を見て、ユウキの表情が緩んだ。

「楽しいわ、安心するしね」
明るく笑う。

「だから、」

「私と死んでくれない？」

「で、カイトさんは何と？」

「もちろん止めました…」

陸が可笑しそうに肩を震わせる。放課後、私はUFO研の部室に立
ち寄つた。ユウキも誘つたが用事があるからと断られてしまった。

「皆瀬さんはよっぽどカイトさんを気に入っているのでしょう」

「…そう、かな…」

「その謙虚な所、充分気に入るに値する理由だと思えますが」

「皆勘違いしてます。私はそんな人じゃないよ」

「私には貴女は自分に対する認識を改めるべきだと思いますが」

悪戯っぽく笑って、陸が写真が数枚入ったアルバムを本棚にしまつた。

「皆瀬さんはどうしてもカイトさんを側に置いておきたいのでしょう」

本当にそうなら、とても嬉しい事だけれど。

校舎の角に存在する此処はUFO研とは名ばかり、野崎以外の部員が来る事は稀らしい。今日も野崎の思惑通り部室の扉が開かれる事は無く、私と彼女の二人で下校になった。

「昨日のは、言葉で宇宙人に居場所を伝える手筈だったのですが」
上手く行きませんね、と嘆息して肩を竦めた。活動も、学校等を探索しているが未だに超常現象なるものは見つけていないらしい。けれど情け無くなんかない、と私は思う。別に何が見つからなくてもいい。皆で捜す事に意味がある。

それを言うと、

「貴女は他人にはとても優しいのに、自分の事になると卑屈なんですね」

と笑われた。

「けれど、やっと見つけたかもしれせん」

「え？」

陸が私を見た。

「ユウキさんには何か人ならざるものを感じます。…注意した方がいいかも知れせんね」

好奇心に溢れた陸の目を、私は呆然と見ていた。

その夜、私は再び学校を訪れた。ユウキも携帯で呼び出したのでじきに来るだろう。

その時野崎は嬉しげに私の隣で顔を緩ませていた。

「何かいいことありました？」

「UFO研に人が来る事は稀だと言ったでしょう。普段は殆ど私と文香だけですから」

「文香さんは今日来るんですか？」

「恐らく」

陸が困ったように眉を下げた。

「文香はあまり口を聞かない子なんですよ」

「どうしてですか？」

「それは直接聞いてみたらどうでしょう」

くすりと陸が笑った。その存外意地悪な表情に目を見開く。

「…陸さん…さっきの話なんですけど」

「ああ、その事ならどうか忘れて下さい」

少し早口で言った。

「ユウキさんが人間じゃないという保証はない。仮に人間じゃ無かったとしても、悪い人じゃない。そう思いませんか？」

「そう、ですよね」

ユウキには何処となく変わった雰囲気がある。そして、私の周囲も変化しつつある。まるで何かか忍び寄るような感覚だ。私が変わらざるを得ないような事態が、近々起こるのではないか。

そんな予感がした。

その夜、ユウキは来なかった。がっかりして帰る私達に校内探索の成果が無かったのは言うまでもなく、今夜会えなかった文香という少女の事を寝る前に私はぼんやりと考えた。

02 吸血鬼

足元に落ちた封筒に私は首を傾げた。拾い上げて表を見ると、《UFO研の人へ》と書かれている。差出人は不明だ。多分、依頼か何かだろう。

私は鞆に封筒をしまつて部室へ向かった。

手鏡にはこう書かれていた。

最近友人が熱を出して練習を休むので家を訪問した。すると、友人の肩には噛み付かれたような跡があり、話によると昨日部活の帰りに学校の廊下で何者かに襲われたという。そしてうなされながら時々思い出したように呟くそうだと。

「血が飲みたい」

と。

背筋が寒くなり、私は身震いした。

「これって、まるで」

「吸血鬼」

ユウキが私の言葉を代弁して溜息を着いた。

「何時から此処はオカルト部になったの？」

手紙を無造作に机に放る。

しかし、確かに最近私のクラスは欠席が多い。もし本当なら…

私は頭を振った。まだ信じるには早い。

「その子の話だけで真相を決めつけるのは早いだろう」

文香が言った。

「それでも、事実なら早めに対処するに越した事はありません。そうでしょう、皆瀬さん」

陸の目は再び輝いていた。ユウキは悪戯を企むような顔で笑った。

「いいわ、少なくとも退屈はしないようね」

初めて柔和な笑顔を崩すユウキを見た私は、まともにこの件と対決

するだろう事を覚悟した。

その後、私とユウキは下校した。

「ねえ」

「はい？」

不意にユウキが私を見た。一見普段の微笑に見えるが目が笑っていない。

「これから、何か危ない目に遭ったら私を呼んでね」

「え？」

「いいから」

有無を言わせない口調だった。

彼女の考える事はよくわからない。危ない目とは、具体的にどんな事だろう。

この平和な世界に生きる限り危険な事なんてないと思うのだけれど。そういえば、昨夜の校内探索に來なかつた理由を聞くと、ただ単に忘れていたらしい。何ともユウキらしい理由だ。けれど、思いの他申し訳なさそうな顔で謝られた為、陸はいくらか溜飲を下げる事が出来た。

翌日。相変わらず地味に欠席者は増え続け、手紙の内容を裏付けるような事態だった。私は昼休みに図書室へ向かった。

「周りの人が吸血鬼だった、なんて小説ではよくある話よね」

ユウキが背割れしそうな本をめくりながら言った。

「ユウキさんは、実は吸血鬼だったなんて事ないですよね？」

「そうだけど」

私は本を取り落とした。

「…え!？」

「何を驚いてるの?そんな事より何故吸血鬼はニンニクが苦手なのか、体内に摂取しないと効かないのかって事の方が考えるべき事じ

やない？」

「血、飲むんですか!？」

まあ人並みには、という妙な返答をされた。

外見的にはユウキはまるで普通の人間だ。私は思わずユウキを凝視した。

目の前の少女はにこりと笑って、

「だから、多分この学校の生徒を襲ったのは私の仲間ね。私は血なんて好き好んで飲まないけど、たいていの吸血鬼は飲まないと苦しいから」

挨拶をするように言った。

陸の《ユウキは人間ではない》という言葉は真実だったのだ。

私は呆然とユウキを見ていた。

03 羊たちの帆走

ひらりと足元に落ちた封筒を見て文香は嘆息した。

白城中学に入学して暫くすると、ロッカーに何通かの手紙を見るようになった。その殆どは恋文で、文香の穏やかなる性格や端正な外見を褒め讃えた後、必ず裏庭に来て欲しいと要望が書き連ねてあるのである。そんな文面を見る度、文香は潜かに憂鬱になった。

文香を呼び出す者は、彼女を寡黙な美少女だと思い込んでいらしいが、そうではない。

文香は本来とても饒舌だ。それこそスイッチが入れば誰にも止められないと思う程。しかし、それを制する為文香は学校では自ら寡黙を装っている。

ふと文香は気付いた。色鮮やかな封筒の中に見慣れた封筒がある事を。何の事はない、地味な茶封筒である。宛名に文香様、差出人は…不明だ。しかし、文香には大体的内容が予想出来た。

《UFO研に入りませんか？》

と書かれているに違いない。何故か毎日のように入っている手紙。しかし、と文香は閑散とした駄箱で考える。UFO研究部など白城中学には存在しない。これから設立するのだろうか。その為の部員集めなら納得がいく。

今、文香は部活に所属していなかった。理由はわからないが何度も勧誘してくれているのに応えないのは悪いかと、お人よし精神で記載されている場所へ足を運んだ。

裏庭に入ると、見慣れた少女がベンチに座って読書していた。

野崎陸。

背の低さと童顔さではクラス内随一の秀才である。余り言葉を交わした事は無いが、本の表紙の文香には読めもしない題名を見ると、頭の良さも随一のような。無遠慮にも凝視していると

「私に何か用ですか？」

外見に似合わずはつきりとした口調である。それにしても、呼出しておいて何か用、は無いのではないか。

「君、私のロッカーに手紙入れたら？」

手紙を見せると文香は苦虫を噛み付ぶしたような顔になった。

「早紀だったら、またそんな事を…」

ボソツと呟いた後かぶりを振る。

「私ではありません。近頃生徒のロッカーに手紙が入っている事があるようですが、それはUFO研の本意ではありません」

「じゃあ誰が…」

「私の友人です。ご迷惑をおかけしました。ごめんなさい」

「いや、別にいいけど…」

それよりも意外だった。どちらかと言えば大人しい部類の陸がそんな奇抜な部の部員だったとは。

不意に陸がクスリと笑う。

「貴女は随分と人によって態度が変わるのですね」

「え？」

「この間、貴女をお見掛けしました。友達と話していたようですが…。よくあんなに舌が回るものだと思われましたよ」

文香は顔から火が出るような感覚を覚えた。隠していた訳ではないが、饒舌なのを隠していたと思われるのは嫌だった。

「顔が真っ赤ですよ。そんなに照れなくても」

「嫌だよ。それに寄りに寄って野崎さんにバレるなんて」

目の前の聡明でしとやかな少女にばれたのは文香にとって羞恥に値する事だ。だが陸は気にした風もなく本を閉じた。

「ほかーく！」

ドスッ。

陸の背中に多大な衝撃が襲った。半ば突き飛ばすように体当たりし、ポニーテールの少女は明るく笑う。

「部員第4号発見！」

「早紀」

陸が窘めた。

「そういう事は止めなさいと言った筈です」

「だってアンタが手伝えって言ったんでしょっよ」

「そういうやり方は好きじゃありません」

それに、と文香を一瞥する。

「彼女には既に許可を取っております」

「え!?!」

文香は耳を疑った。

「ちよつと待て!」

「あの事ばれたくないんでしょう?」

「意外と悪どいな君:!!」

陸は悪戯っぽく片目を閉じ、人差し指を振る。

「ともかく、これで部員5人集まりましたわ。UFO研究部、設

立です!」

人の話を聞け-!という文香の叫びは、春の穏やかな風にかき消された。

それからというものの、文香は陸と会話する機会が増え、彼女の外見とのギャップと人間性に惹かれてゆくのだった。

「どうしたもんかな…」

何通かの手紙が入っているであろうロッカーを開けながら文香は呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1642f/>

Go Go blood girls !

2010年12月3日07時12分発行